

御国の福音

第13回：70週の預言と御国の計画（後編）

はじめに

A. ダニエル書から学んだことの要約

1. バビロン捕囚以降、4つの異邦人王国が世界の覇権を握る。
2. 最後の異邦人王国（反キリストの王国）による支配の期間は、イスラエルにとって苦難の期間となる。特に、最後の3年半において苦難が激しくなる。
3. 3年半の終わりにメシアが地上に来られ、反キリストとその王国を滅ぼされる。そして、イスラエルが回復され、地上に御国が成就する。

B. 70週の預言（9:24-27）について

1. エレミヤは、バビロン捕囚が70年で終わることを預言していた。
2. バビロン捕囚から70年経ち、バビロンはペルシャによって滅ぼされた。
3. ダニエルは今こそ御国の計画が成就する時だという思いをもって、祈り始めた。
4. 天使が介入し、新しい情報をもたらした。
 - (1) イスラエルの民とエルサレムが回復されるまでには、さらに70週が定められている（9:24a）。
 - (2) 「70週」は直訳すると「70の7」。この文脈では、 $70 \times 7 = 490$ 年。
5. 70週は、御国の計画が成就するまでの期間である（9:24b）。
6. 最初の69週間 = 483年間に起こること（9:25）
 - (1) 最初の483年間は、ユダヤ人にとって苦しみ期間でもある。（例：異邦人による迫害や支配など。）
 - (2) 最初の7週 = 49年間に、エルサレムが再建される。
 - (3) それから62週 = 434年経って、「油注がれた者」 = メシアが現れる。

C. 「70週の預言」後半についてよく言われているポイント

1. 69週の後、第70週目が始まるまでの間にはインターバルがある。
 - (1) 69週の後、メシアが死ぬ。
 - (2) このインターバルは、教会時代のことである。
2. 反キリストがイスラエルと7年間の契約を結ぶ時、第70週目が始まる。
 - (1) 最後の70週=7年間は、将来の患難時代の期間である。
 - (2) 反キリストは後半の3年半で契約を破り、イスラエルを迫害する。
 - (3) 7年間が終わると、キリストが地上に再臨され、反キリストは滅ぼされる。

D. 講義のアウトライン

1. 「週」の意味 (9:24a)
2. 70週の6つの目的 (9:24b)
3. 最初の69週間 (9:25)
4. **インターバル (9:26)**
5. **第70週目 (9:27)**

本講義は、旧約聖書における御国の計画の総まとめとして、70週の預言を学ぶものである。

IV. インターバル (9:26)

9:26「その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」

A. 69週と70週目の間にあるインターバル

1. 70週の預言は、エレミヤの70年の預言の成就にインターバルを挟むものである。
 - (1) エレミヤの預言では、バビロン捕囚が終わった後、イスラエルの回復がすぐ実現するように思われた。
 - (2) しかし、実際にはバビロン捕囚の終わりとはイスラエルの回復の間には、70週(490年)が設けられた。

2. 預言におけるインターバルは、聖書預言において一般的に見られる特徴である。
 - (1) メシア預言には、初臨と再臨を同時に語っているものがある。
 - (2) 例：ゼカリヤ書 9:9-10
 - a) 9節は「メシアがろばにのって来られる」という預言である。
 - b) 10節はメシア的王国に関する預言である。
 - c) 9-10節は、文章上は一連の預言だが、実際には9節の成就と10節の成就の間にインターバルがある。
3. 70週の預言の中にも、インターバルがある。
 - (1) 26節の内容は、「六十二週の後」に起こるものであり、最初の69週の間にかかるものではない。
 - (2) さらに、第70週の中で起こるものでもない。文章上、26節の内容は第70週とも区別されている。
 - (3) よって、最初の69週と第70週の間にはインターバルがあると考えるのが自然である¹。

B. インターバルの間に起こること

1. メシアの死
 - (1) メシアは「断たれ」る。
 - a) 「断たれ」はヘブル語で「カラット」。「切る」という意味だが、排除する、断ち切る、滅ぼすといった意味もある。
→この箇所は、最初の69週の後、メシアが殺されることを預言している。
 - b) イザ 53:8では、似た言葉である「ガザー」が、メシアの死に関して使われている。
→この箇所は、イザヤ書53章で預言されていたメシアの死が成就するタイミングを教えている。
 - c) メシアは、エルサレム再建の命令が出てから483年後に現れ、ローマによるエルサレム陥落の前に殺されることになる。

(2) メシアには「何も残らない」。

- a) ヘブル語では「何も持っていない」というイディオムが使われている²。
- b) メシアは何の遺産も残さない貧者として死ぬ、というイメージか？
- c) このイメージは、福音書におけるイエスの処刑の描写と合致している。

2. エルサレム陥落

(1) 「次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。」

- a) メシアの死後、エルサレムと神殿は破壊される。
- b) これに該当する出来事は、紀元70年のエルサレム陥落である。

(2) 「次に来る君主」とは誰か？³

- a) 「次に来る君主」はまだ来ていない。よって、25節で既に到来したメシアとは考えにくい。
- b) 「君主」（ナギード；支配者）がメシアでないなら、次にダニエル書の文脈から思い出されるのは、4つの異邦人王国の王である。
- c) メシアが現れ殺された時点において、第4王国の時代に入っている。よって、「次に来る君主」は、第4王国の中で将来現れる王である。
- d) この「次に来る君主」は、第70週目にも現れている（27節）。よって、具体的には第4王国の最後の王、反キリストのことである。

(3) 「民」とは誰を指すのか？

- a) 「君主に仕えている民」か、「君主と同じ国家／民族に属している民」か？
- b) 文法的には、前者で捉える必要はなく、後者の意味が強調されている⁴。
- c) 紀元70年のエルサレム陥落をもたらしたのはローマ帝国軍である。よって、「民」に該当するのは、ローマ帝国民である。
- d) 「次に来る君主」は反キリストを指している。よって、反キリストが肉体的には古代ローマ人の子孫であるということは大いに考えられる⁵。

3. 戦いと荒廃

(1) 「その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」

- a) 聖書で「洪水」が象徴的に用いられている場合、破壊の大きさを強調している（イザ 8:7-8；28:2；ダニ 11:10、22、26、40）⁶。
- b) ローマ帝国は、エルサレムに圧倒的な破壊をもたらした。

- (2) 後半のヘブル語直訳：そして、終わりまで戦いがあり、荒廃が定められている。
- a) 27 節との繋がりを考えると、第 70 週までエルサレムには戦いと荒廃がある、という意味か？⁷
 - b) 現在は一時的にエルサレムが復興しているが、争いは絶えていない。
 - c) この「戦い」と「荒廃」という文脈の中で、歴史は最後の第 70 週に突入していく。

V. 第 70 週目 (9:27)

9:27 「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」

A. 第 70 週の始まり

1. 70 週の最後の 7 年間

- (1) 反キリストがイスラエルと「堅い契約」を結ぶことによって始まる。
- (2) 後半に入ると、反キリストはイスラエルを裏切り、神殿での礼拝を禁じ、神殿そのものを荒らす。
- (3) しかし、7 年の終わりに、反キリストとその王国は滅ぼされる。

2. 「彼」は、26 節の「次に来る君主」すなわち反キリストのことである。

(1) 文法的考察

- a) 代名詞で節が始まる時、通常、先行詞は前の節に登場している⁸。
- b) ここでは「彼」の先行詞としては、26 節の「次に来る君主」が該当する。
- c) 「彼」を反キリストと考えるのは、文章として自然な解釈である。

(2) 単語からの考察

- a) ガーバルという動詞は、「至上の権力を行使することによって強制的に同意させることを意味している」⁹。反キリストの契約の性質が現されている。

(3) 文脈的考察

- a) 「半週」（3年半）の間、「彼」は「いけにえとささげ物とをやめさせる」。
- b) この行為は、反キリストが3年半の間、聖徒たちを苦しめるという7:25の記述と合致している。
- c) また、反キリストの型であるアンティオコス4世エピファネスの行為とも合致している（8:13）。
- d) ダニエル書全体の文脈と照らし合わせて、9:27の「彼」は7章の「小さな角」と同一人物、すなわち反キリストだと考えるべきである。

3. 反キリストと契約を結ぶ「多くの者」とは誰か？

- (1) 27節中には、「多くの者」が誰かということを示すヒントはない。70週の預言全体の文脈から、「多くの者」が誰かを考えるべきである。
- (2) この預言全体で対象となっているのはイスラエルの民である（24節a）。よって、「多くの者」はイスラエルの民の中の「多くの者」である¹⁰。
- (3) 彼らは他国の王と契約を結ぶ存在であるため、イスラエルの指導者たちを指している可能性が高い¹¹。

4. 「堅い契約」とは何か？

- (1) 契約（ベリート）とは、神とイスラエルの契約に用いられている。一方で、個人間／国家間における「条約」や「同盟」といった意味でも使われている（創14:13；21:37、32；31:44；オバ7）。
- (2) 文脈的に、これは反キリストとイスラエルの間の何らかの条約／同盟である。
- (3) この契約は、不可侵条約のようなものだろうと推測する者もいる¹²。その可能性はあるが、テキストからは、反キリストとイスラエルの条約／同盟とまでしか読み取れない。

B. 第70週の終わり

1. 「半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる」

- (1) 反キリストはイスラエルを裏切り、神殿での礼拝を禁じることになる。
- (2) この行為は、反キリストの予型であるアンティオコス4世による反ユダヤ的行為のひとつである。ここから反キリストによるユダヤ人迫害が始まるのか？
- (3) なお、ここでは神殿が存在していることが前提となっている。
 - a) 将来、エルサレムには神殿が再建される。
 - b) この神殿は不信仰なイスラエルが建てる神殿であり、神に喜ばれるものではない。

2. 「忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる」

(1) 解釈1：神殿における偶像崇拝的行為

- a) New International Version は、「翼」を神殿の一部分と捉えて、「荒廃を起こす忌まわしいものを神殿に置く」という読み方を提示している。
- b) 「忌まわしいもの」(シクート)には偶像という意味もある。よって、反キリストが神殿に偶像を据えると解釈することもできる¹³。
- c) 文法的にも間違いとは言いきれない。ただし、旧約聖書で「翼」(カナフ)が神殿の一部分を指して使われている例はない¹⁴。

(2) 解釈2：反キリストによる大規模な神への反逆行為

- a) より字義的な読み方は、「忌まわしいものの翼の上に、荒廃を起こす者 [が現れる]」である¹⁵。
- b) King James Version は、「忌まわしいもので覆うべく、彼は [それを] 荒らすだろう」と訳している。
- c) 「翼」は「忌まわしい物/行為で覆う」ことを象徴している。
- d) 26節から続く文脈は、「終わりまで戦いと荒廃が続く」というものである。よって、「荒廃を起こす者」は反キリストを指している。

(3) いずれにしろ、反キリストが偶像崇拝的行為、より大きく見れば神への反逆行為を行うという預言である。

- a) 反キリストは、「自分こそ神であると宣言して、神の宮に座る」(IIテサ2:4)。
- b) 反キリストの影響は世界中に及ぶ(黙13章)ため、彼による神への反逆行

為がこの地を覆うことになる。

- c) 反キリストは第70週目全体を通して活動的である。そこでの彼による神への反逆行為は、後半の3年半でピークを迎える。

3. 「そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる」

- (1) 反キリストの破滅は、キリストの再臨によってもたらされる。

Ⅱテサ 2:8「その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」

- (2) 7:26-27で教えられていたように、反キリストとその王国は滅ぼされ、遂にメシアによる地上の御国が実現する。

4. 最初の69週は、キリストの初臨によって完結した。最後の70週目は、キリストの再臨によって完結する¹⁶。

C. 第70週と「主の日」の関係

1. 「主の日」は患難期（患難時代もしくは大患難時代）全体を指している。

(1) イザ 13:9

見よ、主の日が来る。憤りと燃える怒りの、残酷な日が。地は荒廃に帰し、主は罪人どもをそこから根絶やしにする。

- (2) 「主の日」には、以下の要素がある¹⁷。これらは全体として、イスラエルおよび諸国民の両方に及ぶものである。

- a) 神の御怒り（イザ 13:9、13；34:2；エゼ 7:8；ゼパ 1:5、18 など）
- b) 暗闇（イザ 13:10；ヨエ 2:2；アモ 5:18-20；ゼパ 1:5；3:15）
- c) 天体、地上を含めた被造世界における異変（イザ 13:13；ヨエ 2:1 など）
- d) 恐怖（イザ 2:10、19、21；13:6-8；エゼ 7:5、17；ヨエ 2:1 など）
- e) 産みの苦しみ（イザ 13:7）
- f) 荒廃（イザ 13:19-22；ヨエ 2:3；ナホ 2:10；ゼパ 1:1-18 など）
- g) 裁き（イザ 13:4；34:1-2；エレ 25:30-31；ヨエ 1:6；3:2 など）
- h) 悔い改めへの招き（ヨエ 2:12-17；ゼパ 2:1-3；マラ 4:5-6 など）

(3) よって、「主の日全体が患難期であるといえるだろう。

2. 第70週と「主の日」の関係が重要な理由

- (1) ダニエル書において、苦難の期間として強調されているのは「3年半」である。
- (2) この3年半は、「主の日」の特徴に当てはまる。よって、「主の日」=患難期は少なくとも3年半である。
- (3) 問題は、「主の日」=患難期が後半の3年半のみなのか、7年間全体を含むのかということである。
- (4) この問題は、終末論を考える上で大変重要である。
 - a) 1テサ4-5章から見ると、クリスチャンの携挙は「主の日」よりも前である。
 - b) 「主の日」が後半3年半 → クリスチャンは第70週目の途中で携挙される。
 - c) 「主の日」が7年全体 → クリスチャンは第70週目より前に携挙される。

3. 結論としては、第70週に当たる7年間全体が「主の日」である。

- (1) まずは、文脈から考える。
 - a) 26節の「次に来る君主」が、27節で「彼」と呼ばれている。よって、文学的には26-27節は一貫した流れの中にある。
 - b) 70週目は、「戦い」と「荒廃」という文脈の中にある。
 - c) よって、70週目全体が、イスラエルの苦難という文脈の中に置かれている。
- (2) 70週目の特別性
 - a) イスラエルは紀元70年にエルサレムを失った後も、苦難の中に置かれている。この文脈の中で、70週目の7年間に特別に区切られている。
 - b) 70週目は、唯一プロットの形で描かれている週である¹⁸。
- (3) 70週目の一体性¹⁹
 - a) 70週目は反キリストの出現で始まり、彼の破滅で終わる。70週目のプロットにおいて、反キリストは7年間を通してアクティブである。
 - b) ダニエル書は一貫して反キリストを横暴な王として見ている。そのような王がアクティブな期間として7年全体が描かれているならば、7年全体を一体性のある期間として見なすのが適切である。

- c) 後半3年半は、7年間全体から切り離されているのではなく、7年間の中で苦難がエスカレートしたものである。
- (4) ここまでの結論：9:24-27の文学的特徴をふまえると、70週目全体がイスラエルの苦難における特別な期間である。よって、「主の日」を週の後半だけに当てはめるよりは、全体に当てはまると考えた方が自然である。
- (5) 第70週と黙示録の関係²⁰
- a) 黙示録6章は、イエスによって封印の裁きが下されるところから始まる。
 - b) 封印の裁きは、神によってもたらされる、歴史上の特別な裁きである。よって、封印の裁き以降が「主の日」と考えるのが妥当である。
 - c) 封印の裁きの始まりは、反キリストの登場である（黙6:1-2）。
 - d) 封印の裁きに続いて、ラッパの裁きをもたらされる。
 - e) 封印の裁きから第6のラッパの裁きまでは、第70週の後半と対応する3年半よりも前にもたらされている。
 - f) したがって、黙示録6:1-2における反キリストの登場は、後半の3年半の始まりではなく、第70週の始まりと対応していると考えられる。
 - g) 封印の裁き、「主の日」、第70週は開始時点が一致していることになる。
封印の裁きの開始時点 = 「主の日」の開始時点 = 第70週の開始時点
 - h) 黙示録の構造から、6章以降の「主の日」に関する預言は、第70週全体（7年間）を扱ったものであることがわかる。

4. 結論：患難期 = 「主の日」は7年間である。

70週の預言のまとめ

1. ダニエルの70週の預言は、これからの御国の計画のパノラマである²¹。
2. この文脈の中で、遂にメシアであるイエスが到来する。
3. この文脈の中で、メシアの御業によって福音がもたらされる。
4. 私たちは、69週と70週目の狭間に生きている。

¹ Stephen R. Miller, *Daniel*, New American Commentary (Nashville, TN: B&H, 1994), 269–70; Randall Price, “Prophetic Postponement in Daniel 9:24–27,” in *Progressive Dispensationalism: An Analysis of the Movement and Defense of Traditional Dispensationalism*, ed. Ron J. Bigalke Jr. (Lanham, MD: University Press of America, 2005), 233–34.

² Miller, 267–68.

³ 詳細な議論は、Leon Wood, *A Commentary on Daniel* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1973), 255–58 を参照のこと。

⁴ *Ibid.*, 258; Miller, 268.

⁵ *Ibid.*

⁶ *Ibid.*, 269.

⁷ Arnold G. Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah: A Study of the Sequence of Prophetic Events*, rev. ed. (San Antonio, TX: Ariel Ministries, 2003), 195.

⁸ Gleason L. Archer, Jr., “Daniel,” in *The Expositor’s Bible Commentary*, vol. 7, ed. Frank E. Gaebelin (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1985), 116.

⁹ ジョイス・G・ポールドウィン『ティンデル聖書注解 ダニエル書』伊藤僚訳（いのちのことば社、2007年）196頁。

¹⁰ Wood, 259; Miller, 271.

¹¹ Fruchtenbaum, 196–97; Michael Rydelnik, “Daniel,” in *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham (Chicago: Moody, 2014), 1307.

¹² Wood, 259.

¹³ Fruchtenbaum, 197.

¹⁴ Miller, 272.

¹⁵ *Ibid.*, 273.

¹⁶ *Ibid.*, 269.

¹⁷ Craig A. Blaising, “The Day of the Lord: Theme and Pattern in Biblical Theology,” *Bibliotheca Sacra* 169 (Jan.–Mar. 2012): 18.

¹⁸ *Idem*, “A Rejoinder,” in *Three Views on the Rapture: Pretribulation, Prewrath, Posttribulation*, ed. Alan Hultberg (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2010), 104.

¹⁹ *Ibid.*

²⁰ *Idem*, “A Case for Pretribulation Rapture,” in *Three Views on the Rapture*, 58–61.

²¹ 中川健一『クレイ聖書解説コレクション「ダニエル書」』（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ出版部、2015年、電子書籍版）における「9:24～27『70週の預言』」より引用。